



ナラヲヨム Vol.17 2017年3月31日発行 企画・編集・デザイン：奈良県立図書館

Vol.17
2017.3

ナラヲヨム。



奈良と薬草

「もう、だいじょうぶでございますよ。今、薬湯と粥をお持ちしましょう」
小説家 梨木香歩の作『丹生都比売』の一文です。

主人公は草壁皇子（六六二～六八九）。舞台は、壬申の乱（六七〇）により、両親（父・大海人皇子のち天武天皇、母・嶋野讃良皇女のち持統天皇）とともに行幸した吉野宮。当時十歳にも満たない草壁皇子は病弱として描かれてます。作品中、「吉野は水銀の採れる地」で、「当時、水銀は不老不死の妙薬として大変に珍重」、「吉野が蘇りの力を与えてくれる場所」であったとの描写や、いにしえ人が楽しんだ「薬狸」など、薬にまつわるエピソードが随所に挿入されています。



大和当帰の「葉」と「根」 葉は加工品に、根は漢方薬に。根は大きいもので全長約20センチ

大和の地は、古代からくすりの原料・生薬と深い関わりを重ねてきました。東大寺正倉院に残る二十一の漆櫃に納められた六十種類の薬。七三〇年、光明皇后により設けられた施薬院。大峰山・役小角が始祖とされる陀羅尼助など、古くから伝わる多数の処方。江戸時代になると、漢薬の需要はさらに高まり、中国から薬用植物の種苗を輸入する一方、幕府は各地に採薬師を派遣し、国内に自生する薬草木の調査・採集・栽培を行いました。『大和志』（一七三六年）によると宇陀・高市・宇智・吉野などで、地黄、当帰、人参、大黃などが産出されたそうです。写真は『大和当帰』です。日本では十七世紀中ごろから大和・大深地方（現・五條市）を中心に作られ、全国に知られました。第二次世界大戦中、食料統制などにより生産が途絶えましたが、現在、奈良県内の農業者の間で再び栽培が進んでいます。

文・宮川享子（奈良県立図書館情報館）

注1：「薬狸」……わが国最初の薬狸の記録は『日本書紀』六一一年五月条「夏五月の五日に、菟田野に薬狸す」。男性は薬効のある鹿の角をとり、女性には薬草を摘んだという

注2：「大和当帰」 用途：精油（リグスチリド等）を含み、漢方処方薬として、補血、強壮、鎮痛、鎮静などの目的で、婦人薬、冷え性用薬、保健強壮薬、精神神経用薬、泌尿疾患用薬等の処方に高頻度で配合。「当帰芍薬散」「十全大補湯」「四物湯」といった漢方薬に使われている

参考文献……『丹生都比売 梨木香歩作品集』（梨木香歩：著、新潮社、2014）、『森野旧薬園と松山本草 薬草のタイムカプセル』大阪大学総合学術博物館蔵書7（高橋京子・森野てる子：著、大阪大学出版会、2012）、『奈良のくすりのプロフィールⅡ』（奈良県、2014）写真提供……奈良県

ナラヲヨム Vol.17

0 奈良と薬草

1 もくじ

2 リヴァイヴァル！ザ・大和北部八十八ヶ所霊場巡礼

- ・大和北部八十八ヶ所霊場巡礼とは？
- ・現代のパイオニア 京本勝弘さん
- ・ブログやSNSを活用 銀とき子さん
- ・伝統ある巡礼を新しい手法で地域活性化につなげる 金原薫さん / 平山豊さん / 住田幸一さん



佐保川沿いの桜並木（巻末）
図書館情報館前を流れる佐保川は、万葉集の詩歌に詠まれるなど、いにしえより愛されてきました。春日山原生林を源流に奈良市中心部を南西に向かって流れています。川の中流、奈良市法蓮町の下長慶橋から同市香町の和郡山市場までのあいだ約4.5キロの堤には、ソメイヨシノ約1000本もの桜並木が続き、桜の名所として知られています。

14 大和の廃寺を巡る記

きやくようじ かくやでら みけんじ ちょうしやうじ
客養寺（隔夜寺）/ 眉間寺 / 超昇寺（超勝寺）
おのおみわでら かきのもとでら うちやまえいきゆうじ
大御輪寺 / 柿本寺 / 内山永久寺 /
たかまでら ありわでら つついつつ かたおかしみずみょうおういん
高天寺 / 在原寺と筒井筒 / 片岡清水明王院

20 司書サイトーの能楽小鼓体験記 いにしえの音を奏でてみました。

教える人 能楽大倉流小鼓方 久田陽春子さん

26 大和当帰のこと

農業生産法人有限会社ポニーの里ファーム
統括マネージャー 保科政秀さん

34 平城宮跡の顕彰と保存に生涯を捧げた

たなだ かじゆうろう
棚田嘉十郎

- ・ライフヒストリー
- ・平城宮跡保存の立役者 棚田嘉十郎の足跡をたどる

ナラヲヨム Vol.17

発行
2017(平成29)年3月31日

企画・編集・デザイン
奈良県立図書館情報館
奈良市大安寺西1-1000
TEL.0742-34-2111
FAX.0742-34-2777

題字
紫舟

リヴァイヴァル！ザ・

大和北部 八十八ヶ所 霊場巡礼

近年、新聞などで紹介されるようになった「大和北部八十八ヶ所霊場」。約二五〇年前に始まったと伝わるこの霊場に、いま様々な人がアプローチし、観光や地域の元気づくりにつながりつつあります。

文・写真 中西 玄（奈良県立図書館司書）



まづはキホン

大和北部八十八ヶ所 霊場とは？

明和年間（一七六四～一七七二）に始まったと伝わる霊場。第一番大安寺から第八十八番久米寺までの霊場と、番外および別格霊場から構成。幾度かの変遷を経て、現在は番外が東大寺戒壇院など三札所、別格が法華寺など三札所、さらに奥の院として室生寺が指定され、全部で九十五札所となっています。

新たな地域活性化のムーブメントを予感させるこの巡礼について、満願した人、巡礼中の人、諸々の整備を進めている人たちにお話を伺いました。

注：巡礼を完了して満願印をいただいた人へ



リヴァイヴアル！
ザ・

大和北部八十八ヶ所霊場巡礼 現代のパイオニア

京本勝弘さん

たとえ道は険しくとも……

桜井市で会社を経営する京本勝弘さんは、仏教伝来の地で弘法大師にもゆかりのある奈良に、四国のような巡礼はないものかと常々思っていたそうです。そんな時、ある記事に「大和北部八十八ヶ所霊場」の文字を発見！ 大安寺頒布の『大和北部八十八ヶ所霊場巡拝道順』を手に巡礼をスタートしたのは、二〇〇八（平成二〇）年のことでした。

しかし、そこからが苦難の始まり。霊場指定されていることを知らない住職も多く、廃寺や無住寺となった札所もたくさんあったのです。そんな心が折れそうな状況でも、粘り強く歩を進めるのが京本さん。事務局である大安寺と都度連絡を取りつつエピソード満載の巡礼を続け、少しずつ道を拓いていきました。

たとえば第四十二番東光寺。訪れてみると無住寺で、長年の風雨にさらされ廃墟のよう。近所の人曰く「集落の檀家寺ではないが、本山は京都の醍醐寺らしい」とのこと。そこで醍醐寺に赴いて事情を説明した結果、後日新たな納経寺を定めたとの連絡が入ったそうです。

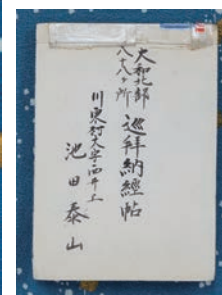


「この巡礼をきっかけに、すべての寺院が活性化されれば」と、三輪山をバックに遠いまなざしの京本さん

最後に大安寺で押していただく満願印



写真は、当館が所蔵する『大和北部八十八ヶ所巡拝納経帖』。大正時代に川東村（現田原本町）の池田泰山氏が巡礼したときの御朱印帖です。変遷しているためいくつかの札所は現在と異なり、また同じ札所でも御朱印の違うものがあります



巡拝順序 1 第 1 番

だいあんじ
大安寺 別格本山 宗派＝高野山真言宗 本尊：十一面観音菩薩

大和北部八十八箇所めぐりの旅が大安寺から始まる。大安寺寺務所で「納経帳」をそろえ住職から授けられる様々な注意を拝聴しておきたい。

歴史

南都七大寺の一つ。大安寺は聖徳太子が額田部に建立した熊凝道場に始まると伝える。精舎は舒明 11 年（639 年）に飛鳥の百済川近くに遷し、最初の国の官寺として百済大寺となり、天武 2 年（673 年）に高市に移り高市大寺となった。天武 6 年（677 年）に大官大寺となる。百済大寺は、舒明天皇（593～641 年）勅願寺で、九重塔（高さ 100m.）がある大寺院で、現在の桜井市大福の古備池廃寺跡が百済寺といわれている。

平城京遷都とともに遷された大安寺は、霊亀 2 年（716 年）に唐から帰国した道慈が唐様式を採りいれ建立した。当時の大安寺は道慈・勤操によって三論宗の学問寺として多くの僧が学問に励んだ。勤操の弟子には空海もあり空海が唐に渡る際は大いに尽力した。大安寺は、外国から多くの来日僧が滞在し学問をした。現代でいう国立総合大学である。



第 1 番霊場 大安寺本堂

当寺は、痛封じの寺で多くの参詣者に親しまれている。毎年、1 月 23 日痛封じの光仁会(笹酒祭)が行われる。

御詠歌

ありかたや たいへいのよに
うまれきて ほとけををがむ
みこそあんらく

すえのよにごりえにすむうろくずも
うかぶや きよきつきのひかりに



白毫寺の宮崎快弁師から贈られた梵字拓本

難難辛苦の末に全霊場を巡った京本さんは、今後巡礼する人の助けになればとお手製のガイドブックを作成。不明な点は図書館をはじめ各地の図書館で調べ、最終的には各札所に原稿を確認してもらったほどの徹底ぶり。目下、活用方法を模索中とのこと。



御朱印や墨跡は実にさまざま。各札所の違いを楽しむのも巡礼の醍醐味

このようにして、仕事の合間を縫ってサバイバルしながらの巡礼をし、数年後に晴れて満願達成。ちなみに、前述の東光寺の御朱印は醍醐寺の住職が本山として代筆してくれたもの。また、第二十三番札所の御朱印が現在の常光寺ではなく元の秋篠寺であるなど、京本さんの御朱印帳は完全オリジナルで非常にレア度の高いものになっています。いやはや、レジェンドというほかありません。

また、「仏様のご縁を感じた」という不思議な出来事も。第三十三番根聖院で応対してくださった住職が、後日再訪するとすでに亡くなられており、ご家族が「長く病気を患っていたが、たった一日だけ元気な日があった」と話された日が御朱印をいただいた日だったとか。

そのほか、札所の住職と話をする機会も多く、「苦勞を重ねておられる」と感心することもしばしばで、そういう方々と出会ったことも霊場巡りのおかげと京本さんは言います。その人柄ゆえ、その後もふとしたきっかけで連絡をもらったり、今もおつきあいの続く住職が何人も。中には、自ら揮毫した書などを送ってくださる方もおられるそうです。



所在地 〒630-8133 奈良市大安寺 2 丁目 18 番の 1

電話 0742-61-6312

開門時間 8 時～17 時（祈祷は 9 時～16 時）

拝観料 無料

駐車場 有り（無料）

交通 JR・近鉄奈良駅で奈良交通バスに乗り、大安寺バス停下車、西へ徒歩 10 分

京本さん自作のガイドブックページ。充実した内容に、いくつもの札所から「出版を」と言われているのだとか



リヴァイヴアル！
ザ・

大和北部八十八ヶ所霊場巡礼

伝統ある巡礼を新しい手法で 地域活性化につなげる

金原薫さん / 平山豊さん / 住田幸一さん



奈良でICT（インフォメーションアンドコミュニケーション）テクノロジー（情報通信技術）を利用したまちおこしを企画・運営している金原薫さんは、この霊場巡礼を「奈良の活性化につながる」と直感し、金融機関職員で満願経験者の平山豊さんと出版社社長の住田幸一さんとともに、専用の御朱印帳とガイドブック作成のための資金をクラウドファンディングで募集。新聞などにも取り上げられ、無事に目標額を達成しました。

クラウドファンディング
達成率一二六%！



左から住田さん、金原さん、平山さん



結婚を機に奈良県民となった銀とき子さん（ハンドルネーム）は、夫婦でお寺巡りをしている最中にこの霊場を知り、2009（平成21）年に巡礼を開始しました。情報が乏しいため、やはりずいぶんと苦労をしているそうです。

銀さんは、巡礼の記録をブログに綴り、札所までの道の勾配や目印などの情報を発信しています。ときには、ツイッターでつぶやくことも。するとそれを見た人から、普段は無住の札所で催される行事といった関連情報をメールでいただいたり、不在であることが多い札所に訪問の話を付けてもらえたこともあったのだとか。Webを利用して情報発信することで、結果として巡礼がよりスムーズにできているという実感があるとのこと。まさに、情報が情報を呼ぶシナジー効果ですね。

ただ、今はまだマニアックな巡礼なので、一見すると入りにくそうなお寺があるのも事実。でも、札所ということで心のハードルが下がるそうです。しかも、参拝者があまり訪れないお寺では予想以上に歓迎されることもよくあり、とてもうれしいと銀さんは話します。



ブログやSNSの情報は、いわば最新の巡礼ガイド。賽銭泥棒の情報をキャッチして注意喚起したことも

リヴァイヴアル！
ザ・

大和北部八十八ヶ所霊場巡礼
ブログやSNSを活用
銀とき子さん



御朱印帳を手に持つ銀さん。大安寺の笹酒祭りの時に最新版の『大和北部八十八ヶ所霊場巡拝道順』をもらうのが、ここ数年の恒例行事だそうです。

そもそも、奈良に移り住んでから観光として着物でお寺などに行くのが楽しくて、続けているうちにディープなハマリ方になったとのこと。またそこには、銀さんが「追っかけ」を自認する帝塚山大学の西山厚教授の存在も大きいそうです。というのも、正倉院に関する講義を聞いたのをきっかけに、同教授の講座などを受けるようになり、仏教や仏像への興味と知識が深まっていったのだとか。

着物コンサルタントをしつつ、自作の天平衣装などでイベント参加にも積極的な銀さん。この巡礼はライフワークであるものの、仕事のかたわらなのであくまでもマイペース。でも、あと少しで満願するそうです。時間をかけた分、喜びもひとしおのはず。

図書館にはこんな資料も！



『大和北部八十八ヶ所御詠歌』
1924(大正13)年5月

2009(平成21)年に第29番札所の極楽寺が復刻した御詠歌集です。巻末に、池田屋六兵衛(前述)の遠祖・竜見仙太郎が刊行した旨記されています。中身を見ると、なぜか本尊が現在と異なる寺院がいくつもあります。



『大和北部八十八ヶ所霊場道順』

1974(昭和49)年に発行したものを極楽寺が復刻した霊場リスト。およその大きさはタテ18センチ・ヨコ72.5センチです。

「明和六年己丑正月 元願主 大和郡山町 池田屋六兵衛」とあるので、底本は1769年の発行と思われる。現在大和北部八十八ヶ所霊場巡拝道順』と比べると、順番の違いや札所の変遷がわかります。

新番組

大和北部八十八ヶ所霊場を訪ねて

木曜日 10:30~11:00 第1・3週:本放送/第2・4:再放送

「大和北部八十八ヶ所」は、今から約250年前の江戸時代中期・明和年間(1764~1772)に制定された弘法大師ゆかりの霊場です。しかし、現在は廃寺や無住となっているところもあり、すべてを巡るのが難しく、幻の霊場とまで言われています。今回、そのお寺のご住職にお話を聞き巡礼の旅に出る番組です。

聞き手 松本道寛 三村一

提供: 大和北部八十八ヶ所霊場を守る会

プロモーションの一環として、「ならどっとFM」で各札所の住職が数珠つなぎでゲスト出演する番組『大和北部八十八ヶ所霊場を訪ねて』を放送

大和北部八十八ヶ所霊場巡りは、江戸時代から続く歴史ある巡礼。しかし今この霊場の話をすると、相手が奈良の人でも、巡礼ブームに乗ってにわかに作ったと思われることが多いそうです。なので、まずは地元の人に知ってもらいたいとのこと。また、実際に巡礼している人々も、今は暗中模索に近い状態。あちこちに散らばっている情報のどれが正しく、またどれが最新なのかはつきりしません。ということで、三人は現在、この霊場巡りの普及と定着を目的とした新たな組織作りを進行中です。ただしプライベートなものではなく、各札所公認のもの。最新で公式な情報を集め、最大限活用してもらうことを考えています。今後、やるべきことは盛りだくさん。ウェブサイトを立ち上げ、ガイドブックに収録していない周辺情報などもカバーしたいとのこと。また、札所への道標の整備なども必要です。あとは、どう情報を広げていくか。行政の協力が必須のものもあるでしょうが、やはりみんなが育てなければと、まずは地元ラジオ局でPR番組を開始。ゆくゆくは、ツアーやセミナーなども企画中だとか。これからの展開から目が離せません。

FAAVO

アンバサダー 都道府県別 検索ワードで探す チャレンジ ログイン

「大和北部八十八ヶ所霊場」のご朱印帳をつくらう！

奈良 観光・まちおこし

集まっている金額
1,134,000円 (目標 900,000円)

達成率 **126%** 支援者数 **224人** 残り **終了しました**

終了しました

プロジェクトをフォローする

いいね! 913 ツイート 遅め込み

「大和北部八十八ヶ所霊場」の御朱印帳をつくらう！

クラウドファンディングは昨年8月8日に開始(八十八ヶ所だけに!)。募集期間が過ぎた今も、問い合わせや応援メッセージをたくさんいただくそうです



「三人寄れば文殊の知恵」
新展開企画。

なお、このガイドブックは書店でも販売
すること。また御朱印帳も、今回のクラウドファン
ディングの支援者用ですが、販売用のものもデザインを変
えて作成する予定だそうです。



写真は御朱印帳のサンプル。実物の前表紙には、大和寺の河野貴主が揮毫した外題(表題)がつけます

今回作成する御朱印帳は、写真のとおり親しみのあるデザイン。ただ、御朱印集めを目的にしまうと、スタン
プラリー化して伝統が廃れてしまう危惧があると金原さん
は言います。四国八十八箇所霊場が続いてきたのは、やは
り人々の願いがあるから。奈良でも同じように根付いてほ
しいと、ガイドブックは「信仰からブレないように」と、
霊場を知ってもらえる内容に編集しています。

大和北部八十八ヶ所霊場

大安寺発行『大和北部八十八ヶ所霊場巡拝道順(H28年6月現在)』を元に作成

- 第1番 大安寺 奈良市大安寺2-18-2
- 第2番 大安寺嘶堂 奈良市大安寺2-18-2
- 第3番 西光院 奈良市高御門町21
- 第4番 徳融寺 奈良市鳴川町25
- 第5番 元興寺(塔跡) 奈良市芝新屋町12
- 第6番 十輪院 奈良市十輪院町27
- 第7番 福智院 奈良市福智院町46
- 第8番 新薬師寺 奈良市高畑町1352
- 第9番 元興寺 奈良市中院町11
- 第10番 伝香寺 奈良市小川町24
- 第11番 圓證寺 生駒市上町4713
- 第12番 真言院(東大寺) 奈良市雑司町406
- 第13番 崇徳寺 奈良市大豆山町7
- 第14番 空海寺(要予約) 奈良市雑司町167
- 第15番 般若寺 奈良市般若寺町221
- 第16番 高林寺 奈良市井上町32
- 第17番 大森大師(廃寺) 奈良市大森町283
(納経は済美小学校五軒北の中村氏宅)
- 第18番 不退寺 奈良市法蓮町517
- 第19番 海龍王寺 奈良市法華寺北町897
- 第20番 円福寺 奈良市佐紀町2667
- 第21番 安楽寺 奈良市中山町1303
- 第22番 賢聖院 大和郡山市矢田町1937
- 第23番 常光寺 奈良市押熊町212
- 第24番 西大寺 奈良市西大寺芝町1-1-5
- 第25番 喜光寺 奈良市菅原町508
- 第26番 唐招提寺 奈良市五条町13-46
- 第27番 唐招提寺奥院 奈良市五条2-9-6(西方院)
- 第28番 往生院(無住) 生駒市有里町
(納経は第1番大安寺)
- 第29番 極楽寺 奈良市七条1-2-14-2

- 第30番 愛染堂(廃寺) 大和郡山市九条何和町
(納経は同市九条町1312-3山中商店)
- 第31番 霊山寺 奈良市中町3879
- 第32番 霊山寺地藏院 奈良市中町3879
- 第33番 根聖院 奈良市三碓3-5-13
- 第34番 宝山寺 生駒市門前町1-1
- 第35番 教弘寺(無住) 生駒市小倉寺町539
(納経は第54番松尾寺)
- 第36番 円福寺 生駒市有里町390
- 第37番 竹林寺(無住) 生駒市有里町211-1
(納経は第26番唐招提寺に問合せ)
- 第38番 宝幢寺 生駒市小平尾町271
- 第39番 千光寺 生駒郡平群町鳴川188
- 第40番 金勝寺 生駒郡平群町横原53
- 第41番 平隆寺 生駒郡三郷町勢野東2-11-60
- 第42番 東光寺(無住) 生駒郡平群町三里中ノ宮293
- 第43番 長楽寺 生駒郡平群町吉新2-1-8
- 第44番 地藏寺 生駒郡平群町福貴
- 第45番 多聞院(奥ノ院) 生駒郡平群町信貴畑1474
- 第46番 朝護孫子寺 生駒郡平群町大字信貴山2280
- 第47番 持聖院 生駒郡三郷町勢野東6-7-27
- 第48番 融念寺 生駒郡斑鳩町神南3-5-8
- 第49番 薬師寺 奈良市西ノ京町457
- 第50番 法隆寺北室院 生駒郡斑鳩町法隆寺山内1-1
- 第51番 法隆寺西円堂 生駒郡斑鳩町法隆寺山内1-1
- 第52番 法起寺 生駒郡斑鳩町岡本1873
- 第53番 法輪寺 生駒郡斑鳩町三井1570
- 第54番 松尾寺 大和郡山市山田町683
- 第55番 矢田寺 大和郡山市矢田3506
- 第56番 矢田寺観音堂 大和郡山市矢田3506

- 第57番 阿弥陀院 大和郡山市番条町614
- 第58番 釈尊寺(無住) 大和郡山市高田町
(納経は吉田理髪店)
- 第59番 薬園寺 大和郡山市材木町30
- 第60番 誕生寺(要予約) 奈良市三棟町2
- 第61番 春岳院 大和郡山市新中町2
- 第62番 十三鐘菩提院 奈良市高畑町1126
(納経寺)※菊水楼西隣
- 第63番 奈良市白毫寺町392
- 第64番 光明院大師堂(無住) 大和郡山市番条町564
(納経は中谷酒造)
- 第65番 正福寺 大和郡山市発志院町410
- 第66番 大野寺 宇陀市室生大野1680
- 第67番 龍象寺 奈良市柴屋町(帯解本町)177
- 第68番 帯解寺 奈良市今市町734
- 第69番 円満寺(無住) 奈良市下山町109
(納経は自治会長宅)
- 第70番 満願寺 奈良市横井3-181
- 第71番 東光寺 桜井市大字谷381-1
- 第72番 極楽寺(無住) 奈良市山町685
(納経は信徒総代宅)
- 第73番 正暦寺 奈良市菩提山町157
- 第74番 弘仁寺 奈良市虚空蔵町46
- 第75番 霊仙寺 天理市森本835
- 第76番 聖林寺 桜井市下692
- 第77番 不空院 奈良市高畑町1365
- 第78番 地藏寺 大和郡山市新庄町252
(納経は同市小林町235新福寺)

- 第79番 観音寺 橿原市小房町6-22
- 第80番 長岳寺 天理市柳本町508
- 第81番 平等寺 桜井市三輪38
- 第82番 文殊院 桜井市阿部645
- 第83番 本光明寺 磯城郡田原本町千代1159
(納経は第34番宝山寺)
- 第84番 秦楽寺 磯城郡田原本町秦庄267
- 第85番 百済寺(無住) 北葛城郡広陵町百済1168
(納経は当麻町当麻1263当麻寺西南院)
- 第86番 与楽寺 北葛城郡広陵町広瀬797
- 第87番 額安寺 大和郡山市額田部寺町
- 第88番 久米寺 橿原市久米町502
- 番外 戒壇院 奈良市雑司町406-1(東大寺)
- 番外 慈光院 大和郡山市小泉町865
- 番外 観泉寺 生駒市小瀬町582
- 別格 法華寺 奈良市法華寺町882
- 別格 中宮寺 生駒郡斑鳩町法隆寺北1-1-2
- 別格 円照寺 奈良市山町1312
- 奥の院 室生寺 宇陀市室生78



室町時代のお公家さんで一流の文化人★三条西公条の『吉野詣記』。
六十六歳の公条さんが書いた旅日記から、当時隆盛を誇りつつも、
のち廃止された寺院「廃寺」を選び、見て回った司書★カミタの

さんじょうにしきんえだ

よしのもうでせ

大和の廃寺を巡る記

文・写真 上田裕介（奈良県立図書館情報館司書）



『大和名所図会』（1791〈寛政3〉年発行）「佐野のわたり」の挿絵（部分）。
雪の中、馬に乗った貴人が三人の従者を連れて川を渡る姿が描かれている。佐野のわたり
は『万葉集』や『新古今和歌集』にも詠まれた和歌の名所。場所比定はされていないが、
大和名所図会では桜井市三輪崎付近を佐野のわたりとしている。三条西公条は『吉野詣記』
に、大和の佐野のわたりを通過した時のことを「風が強く吹きつけてきたが、この時は雨
の降りそうな気配もなく、空は一点の雲もなかった」と書き記している。

廃寺へゴー！



世界的に有名な寺院から地元のお寺まで、奈良には古代から続く寺院がたくさんあります。しかし、残念ながら途中で廃寺となってしまう寺院も存在します。廃寺について知るには、昔の人が残した記録や絵図などを頼るほかありません。そこで今回は、室町時代の公卿、三条西公条が残した『吉野詣記』を手がかりに廃寺を訪ねてみたいと思います。

二十二日間の

旅日記



『吉野詣記』

『吉野詣記』とは三条西公条が書き残した旅日記です。

一五五三(天文二十二年)二月二十三日から足かけ二十二日間の旅は、吉野への花見のほか、大和国各



大和の廃寺を巡る記

地の名跡に加え、高野山や住吉神社・四天王寺などへも参詣する長旅になりました。当時は戦国の乱世ではないように思われますが、この時の大和国は比較的安定しており、危険な目にも合わずに旅することができたようです。では『吉野詣記』の記述とともに、現在の様子を写真で紹介します。

室町時代の

貴公子☆

三条西公条



三条西公条は、室町時代の公卿です。父は三条西実隆であり、息子の公条も和学(わがく)の興隆に尽くすなど当時第一級の文化人として名を馳せました。一五四三(天文十二年)年に五十七歳で隠居し、翌年には出家して仍(じよう)覚(かく)と名乗っています。

参考文献……『奈良市史 社寺編』奈良市史編集審議会編 1985、『奈良県の地名』平凡社〔編〕平凡社、1981

アクセス……近鉄奈良駅から市内循環バス「破石」下車徒歩 10 分



「これより高円(たかまど)の傍ら、羽買(はがい)の山の下に、客養寺とて心ざし深き人住みけり。さまざまの興を尽せること限りなし」

公条が訪れた時には客養寺があり、ここに住む人物から様々の心を込めたもてなしを受けたようですが、いつのころからか廃れてしまったようです。江戸時代に書かれた地誌『奈良坊目拙解』によると現在の奈良市高畑町(たかばたけちょう)には客養寺町という地名があり、春日社の禰宜(ねぎ)が住む無税地(むぜいち)でした。「客養寺隔夜堂」と呼ばれるお堂が存在し、桜井の長谷寺との間を隔夜に往復する勤行がおこなわれていました。本尊の十一面観音菩薩立像は長谷観音の十分の一の模像とのことで、何か縁があるのかもしれません。隔夜堂を中心に再興されたのが現在の隔夜寺(写真)です。

ならぼうもくせつかい 『奈良坊目拙解』……無名園古道、俗名村井勝九郎(むらい かつく ろう 1681～1749)の著。古道は外科医を業としながら地誌に情熱を注いだ。35 年を費やして執筆した漢文の地誌で、1735(享保 20)年に完成。市内各町々の境域や隣接地、町名由来、寺社堂塔の由来、町内の古伝、現況および家数・人口などを約 200 種の古典書目から引用傍証したもので文献句碑による考証を主とした奈良の本格的な地誌といえる。

長谷寺との「往復マラソン」地点

客養寺

(隔夜寺)
奈良市

超昇寺 (超勝寺) 奈良市 たびたび戦場となりました



「これより法華寺、海竜王寺、超勝寺、西大寺に参り…」

この寺は平城天皇の皇子真如（高丘親王）の創建とされていますが、年代は不明です。中世の記録『大乗院寺社雑事記』によると何度も火災にあっていることがわかります。寺近くの超昇寺城が大和国北部の国人・筒井氏の拠点だったことから、兵火に巻き込まれることが多かったようです。『和州旧跡幽考』には「天正年中に絶へ果て今は形ばかりなるいほりに大日如来一軀あり」とあり、ほぼ焼失してしまったようです。江戸中期に僧侶隆光が一部を復興しますが、明治期に廃寺となりました。佐紀神社（写真）は超昇寺建立と同時に鎮守神として崇められた神社です。近辺には「本堂畑」「塔ノ坊」などの地名が残るほか、神社かたわらの御前池南堤防には礎石が残されています。

『和州旧跡幽考』……1682（天和2）年に刊行された大和国の地誌。著者は大和郡山の町人で俳人としても知られる林宗甫。内容は和和15郡にわたり大小の旧跡寺社について記したもので、約200種におよぶ参考文献から考証し、みづから踏査、収載する項目は非常に多く記述も詳細である。題簽は「大和名所記」となっているが、他書と紛らわしいので内題の「和州旧跡幽考」の書名を用いることが多い。

参考文献……『日本城郭大系第10巻』平井聖〔ほか〕編 新人物往来社、1980 『奈良県の地名』平凡社〔編〕平凡社、1981
アクセス……近鉄西大寺駅から北へ徒歩15分



「眉間寺参りしに、糸桜盛りなる、
～ぬきとめぬ露の匂ひも春風の花は柳の糸に乱れて～
紹巴とありしかば、
～糸による名をくり返し花桜うち散る露もぬきてとどめよ～」

眉間寺は奈良時代に開かれた古刹で、創建は定かではありませんが、聖武天皇が藤原氏のために建立した、あるいは聖武天皇没後に陵墓の傍らに建立されたともいわれています。古くは「眺望寺」と呼ばれるほど眺めの良い寺であつたらしく、公衆も寺の高い所に登ってその光景を和歌に詠んでいます。『大和名所図会』には佐保川から陵墓の斜面にかけて広がる立派な伽藍の様子が描かれていますが、明治の廃仏毀釈によって廃寺となり、今は石碑（写真）が立つのみです。

『大和名所図会』……江戸時代に書かれた大和についての絵入り地誌。6巻7冊。6の巻を乾・坤2冊とする。1791（寛政3）年5月刊。奈良正田の植村萬言の遺志を聞き、京都の文人秋里籬島が編纂した。挿絵は大坂の浮世絵師竹原春朝斎信繁。はじめに大和・奈良の名称のいわれについて述べ、以下郡ごとに社寺・名所・旧跡などについて、ゆかりの和歌なども配しながらその由来を記し、風景画のほか和歌や伝承に関する絵もさし挟んでいる。

参考文献……『奈良市史 社寺編』奈良市史編集審議会編 1985、『奈良県の地名』平凡社〔編〕平凡社、1981

アクセス……近鉄奈良駅から北へ徒歩20分 奈良地方気象台前

眺めは最高だった寺

眉間寺

奈良市

柿本寺

かきのもとでら 天理市 古代歌人の足跡を辿って

「今日ぞ見ることは筆に柿の本もとより朽ちず残る姿を」
(筆に書きとめた歌はいつも見るが、昔からそのまま朽ちずに残る姿を
今日初めて拝んだことだよ)

和邇下神社境内にあった柿本氏の氏寺です。寺跡には礎石の一部（写真）が
残っており、付近から奈良時代の瓦が出土したことから、創建は奈良時代に
さかのぼると考えられています。鎌倉時代の作とされる「柿本宮曼荼羅図」
には柿本寺の礎石らしきものが描かれていることから、鎌倉時代にはすでに
荒れてしまっていたことが伺えます。その後室町時代に現在の櫛本小学校西
側に移転し、江戸時代にかけて代々学僧を輩出したということですが、ここ
も明治初年に廃寺となりました。現在も寺跡の近くには柿本人麻呂を葬った
とされる「歌塚」が残り、歌塚の碑文や人麻呂の石像が置かれています。



『柿本宮曼荼羅図』……鎌倉時代に作られた曼荼羅図。絹本着色で重要文化財に指定されている。図には治道社（和邇下神社）・歌塚・柿本寺が描かれており、当時の位置関係を知ることができる。箱書には「治道社歌塚柿本寺図 住吉慶恩筆」とあり、現在は和邇下神社が所蔵している。

参考文献……『改訂天理市史本編上巻』天理市史編さん委員会編 1976、『季刊美のたより No.165 2009 冬』大和文華館 2009 年 1 月 6 日、『奈良県の地名』平凡社 [編] 平凡社, 1981

アクセス……JR 櫛本駅から東へ徒歩 3 分、国道 169 号線を南へ徒歩 2 分、和邇下神社の鳥居をくぐり東へ直進。和邇下神社参道脇。



「楊本天神に参り、穴師川を渡り、檜原・大御輪寺に参りたるに、寺のさまうるはしく、尋常の作りざまにあらず。楔などいふ物も用ひず作れるさま、物語りせり」

大御輪寺は大神神社の神宮寺として創建され、古くは「大神寺」「三輪寺」などの名で史料に出てきます。1285（弘安 8）年に観尊によって再興され、寺号を大御輪寺と改められました。江戸時代に書かれた『廣大和名勝志』によれば三重塔・護摩堂などを備えた伽藍があったということですが、寺の全体像は明らかになっていません。また、本居宣長は『菅笠日記』にて、仁王門や三重塔に加え本尊の脇に大神神社の若宮が祀られていると書いています。これらの記述から、ずいぶん立派な寺であったことは間違いのないと思われ、当寺を訪れた公衆も寺の様子が荘厳で一般の作りではないと書き残しています。そんな大御輪寺も明治の廃仏毀釈で廃寺になり、本尊の十一面観音菩薩立像は聖林寺（桜井市）、四天王立像は長岳寺（天理市）、地藏菩薩像は法隆寺（斑鳩町）に移されました。また本堂は大直禰子神社の本殿（写真）となり、国の重要文化財に指定されています。

『廣大和名勝志』……安永年間（1772～80）に書かれたと類推される大和国の地誌。著者は添下郡足田村の植村禹言。

『菅笠日記』……本居宣長により書かれた紀行文。1772（明和 9）年の大和旅行を記録したもの。宣長の擬古文の中でも巧妙・流麗であり、また 55 首の和歌が挿入された文学性豊かな著作として知られる。

参考文献……『重要文化財大神神社摂社大直禰子神社殿修理工事報告書』奈良県教育委員会事務局 奈良県文化財保存事務所編 奈良県教育委員会, 1989

アクセス……JR 三輪駅から大神神社参道二の鳥居を左折して直進 徒歩 2 分

今も立派な本堂が残っています

大御輪寺

桜井市



(写真左から) 橋本院、高天彦神社、高天彦神社参道

高天寺 御所市

神話の故郷に建てられた高原の寺院

「朽ちてだに 梅も高天の花の色に 八雲を声に 残す鶯」
(朽ち枯れてさえも咲く、有名な高天寺の梅の花の美しさに誘われて、鶯は八雲の歌の尊さを伝え鳴いている)

高天寺は高天彦神社(写真左上)付近にあった寺院で行基菩薩創起の寺と伝えられています。『大乘院寺社雑事記』の長禄3(1459)年9月27日条には「高間寺炎上 徳政故云々」とあり、このほか何度か焼失の憂き目にあっているようです。江戸時代の状況は『大和志』によれば「正堂一宇僧舎六院有天文明応告勝界内有鶯宿梅蜘蛛窟」とあり、本堂一つに僧舎六つの他、鶯宿梅・蜘蛛窟という史跡があると記されています。これらは現在も高天彦神社近辺に残されており、鶯宿梅は神社東側・参道入口の付近に、蜘蛛窟はそこからさらに東へ進んだ山林の中にあります。鶯宿梅には弟子の死を嘆き悲しむ僧の元に、弟子が鶯となって訪れ歌を詠んだという話が伝えられ、伝承により高天は鶯の名所とされてきました。この地を訪れた公条も、鶯にまつわる歌を詠んでいます。

神社から高天の集落を抜けて500mほど歩くと橋本院(写真左下)が見えてきます。橋本院は高天寺の後身で、本尊の十一面観世音菩薩像は高天寺本堂のものを移したものです。今も葛城古道を散策するコースとして多くのハイキング客が訪れます。

『大和志』……『五畿内志』のうち、大和国について書かれた巻の名称。『五畿内志』は、江戸幕府による最初の官撰地誌『日本輿地通志畿内版』の通称。関祖衡・並河誠所らが編纂した。記述にあたっては、各地を巡って地理を確認し、収集した古文書・古記録や調査した伝承歌謡などを根拠に書かれており、内容は精密で後に出された地誌・名所図会などに引用されているほか、現在も十分に利用できる史料とされている。

参考文献……『御所市史』御所市史編纂委員会 臨川書店、1987、『奈良県の地名』平凡社〔編〕平凡社、1981

アクセス……近鉄御所駅から奈良交通バス五條バスセンター行き乗車「風の森」下車 西へ徒歩約1時間

「内山にてしばらく足を休め…」

『吉野詣記』には石上神宮参拝後、内山にてしばらく足を休めたとあります。ここには永久寺がありました。創建は永久年間(1113～18)鳥羽天皇の勅願によると伝えられています。1595(文禄4)年には、豊臣秀吉から寺領971石を寄進され江戸時代以降も受継ぎます。最盛期には50以上の坊を構える大和有数の大伽藍であり、現地には在りし日の様子を描いた図が掲げられています。しかし明治の廃仏毀釈により徹底的な破壊を受け、廃寺になりました。この時寺宝は各地に散逸し、一部は海外に流出しました。現在は寺の鎮守拝殿が石上神宮摂社の出雲建雄神社の拝殿として移築されているほか境内にあった池(写真)などが、当時の名残をとどめています。

内山永久寺

大寺院も今は昔……

天理市



参考文献……『内山永久寺の歴史と美術 研究編』東京国立博物館編 東京美術、1994、『内山永久寺の歴史と美術 史料編』東京国立博物館編 東京美術、1994、『改訂天理市史 本編 上巻』天理市史編さん委員会編 1976、『奈良県の地名』平凡社〔編〕平凡社、1981

アクセス……JR・近鉄天理駅から奈良交通バス菅原行き乗車、「石上神宮前」下車、徒歩20分。

片岡清水明王院

香芝市

病氣平癒を祈る



「花みな散り果てたるもとにて、酒など持たせてしばらくありて、片岡清水明王院に至りて夜を明かしけり」

片岡清水明王院(写真)の神宮寺でした。創建は不明ですが、伝説では元禄年間(1688--1703)に盲目の僧侶が境内の井戸で目を洗い、目が見えるようになったことが由来とのこと。しかしこれでは公条の話と合わない、室町時代以前から寺はあったのでしょう。建物は現社務所の位置にありましたが、明治の神仏分離令で廃寺となりました。現在神社境内には、明王院と刻まれた石灯籠が残るのみです。志都美神社には盲目の僧以外にも病氣への霊験が伝えられており、1879(明治12)年8月にコレラが流行した際(うじこ)氏が疫病侵入防止を祈願した結果1人の患者も出なかったそうです。記念碑が本殿背後の石垣に奉納されています。また神社背後の森は椎の木を中心とした原生林で、県の天然記念物に指定されています。

参考文献……『香芝町史』香芝町史調査委員会編 1976、
『志都美村史』志都美村編 1956、『奈良県の地名』平凡社〔編〕平凡社、1981

アクセス……JR志都美駅を西へ、徒歩10分



「道少し行きて、ある女わらはべに問ひければ、昔の「筒井筒井筒にかけし」とよみし井のもとなど教へける、形のごとく残れり」

在原寺の創建は835(承和2)年、在原業平の父・阿保親王が観音を信心して業平が誕生したことにちなみ建てられた、または880(元慶4)年に業平が病没した後、邸宅跡に場所に建てられた寺とも言われています。どちらにせよ業平に非常に関係の深い寺であったことは間違いないのですが、1868(明治元)年に廃寺となりました。現在は業平・阿保親王を祀る在原神社(写真)が鎮座しています。神社は元々在原寺の鎮守社でしたが、明治の神仏分離により神社のみ残りました。敷地入口には「在原寺」の標石が立っていますが、裏に「在原神社」と彫られています。廃寺になった時、裏返して神社の標石とした名残です。境内には『伊勢物語』に出てくる筒井筒(写真左端)も残されています。

『伊勢物語』……平安時代の歌物語。作者不明。話の冒頭部分が概ね「昔、男ありけり……」で始まり、男の恋愛や友情、別離などが和歌を中心に語られる小編の物語集。『在五が物語』『在五中将の日記』とも呼ばれ、主人公は在原業平とされている。(在五は在原業平を指す)筒井筒は『伊勢物語』二十三段に出てくる話で、幼馴染の男女が筒井筒で背比べをしたことにちなむ恋物語である。

参考文献……『改訂天理市史 本編上巻』天理市史編さん委員会 1976、
『奈良県の地名』平凡社〔編〕平凡社、1981
アクセス……JR橿原駅から東へ徒歩3分、国道169号線を南へ徒歩3分、西名阪自動車道南側の側道を右へ徒歩1分。

恋愛上手のプレイボーイにまつわる寺
在原寺と筒井筒

天理市

話題の「和ハーブ」の一つ「大和当帰」は、江戸時代中期から主に大和で生産されてきました。当帰は栽培に手間がかかる植物ですが、現在、栽培拡大に向けての取り組みが進められています。大和当帰生産者のお一人にお話をうかがいました。

大和当帰のこと

農業生産法人有会社
ポニーの里ファーム統括マネージャー
保科政秀 さん

「ポニーの里ファーム」は高取町で二〇〇六年に創業した農業法人です。約二町の農業地では青ネギ、米、黒豆、ジャガイモ、タマネギなどの生鮮野菜と、大和当帰、ヨモギ、ハトムギ、ハブ草などの「和ハーブ」を作っています。

大和当帰は、根は漢方薬に、葉っぱは加工品となります。

ぼくたちの畑では二〇一一年に栽培を始めました。ある時、奈良県の職員さんが「いっかい植えてみ」って苗を持ってきてくれたのはじまりです。試験栽培でなかなかええ感じの根っこが採れたので、

漢方専門の卸問屋さんに見てもらおうと「しっかりできて」と太鼓判を。

卸問屋さんいわく、ぼくたちの畑の質は、大和当帰の栽培に適しているのだそうです。

大和当帰は、種まきから収穫まで二年かかります。

まず一年目の四月、畑に種をまき、翌年の四月までかけて苗作りをします。二年目の四月、成長した苗を別の畑に植え替え。十一月末までの間、二、三回に分けて葉っぱを収穫します。三回収穫するしたら、五月か六月に一回、九月に一回、最後に十一月、という具合です。

根っこは十二月か一月に掘り上げます。寒い時期に収穫するのは、根が越冬のために養分を溜め込み、もっとも肥えて元気な状態だからです。

ちなみに、よく、パンフレットなどで大和当帰が紹介されるとき、花の写真が載せられています。花は二年目の六月に咲きますが、じつは、このとき根っこは枯れてしまっています。

根っこを収穫して一カ月ほど天日干しをしたら「湯もみ」をします。湯もみとは、根っこを四十度くらいのお湯に浸けながら、洗濯板を使って土を洗い流す作業です。湯もみをする、根に含まれる糖分が増えて甘みが増すと言われています。湯もみのあと、再び天日干しをしてようやく出荷します。

大和当帰はセロリやパクチーみたいな香りがするので、好みが分かれてしまいがちですが、ぼくたちが手がけている大和当帰の加工品作りでは、あえて香りは抑えず、当帰の風味がしっかり伝わるよう工夫をしています。これまで商品化したのは、当帰葉入りのハーブソルトやお茶など。

なかでも当帰の葉を焙じた「焙煎大和当帰葉茶」は、地元のおばあちゃんが自宅で作っている薬草茶の製法をヒントにしました。おばあちゃんのお茶、すごくおいしいので味の秘密を聞いたら、「葉っぱを煎るには土鍋が一番」と教えてくれた。たしかに焙煎にはフライパンよりも土鍋を使うと香ばしさが増します。大和当帰や葛の花など七種類の薬草をブレンドした「やまとたかとりやくぜん茶」は近畿日本鉄道の「青の交響曲（シンフォニー）」の車内販売メニューの一つとして採用されました。

ほしなまさひで 一九八八年滋賀県生まれ。大学院で文化人類学を専攻。フィールドワークで奈良県高取町へ二年間通う。奈良県内の一般企業へ就職後、高取町の農業生産法人有会社ポニーの里ファームへ。

農業生産法人有会社ポニーの里ファーム 奈良県高取町の農業生産法人。農産物の生産、販売や加工品の製造、都市と農村イベント企画などから地域の農業発展に貢献する。障害者就労支援、型、ホルテの森と共に活動も行う。奈良県高市郡高取町兵庫一九三二

取材・文：宮川享子（奈良県立図書館情報館）写真：大和当帰の葉（撮影：吉田奈麻）

いにしえの音を奏でてみました。

教える人

ひさだやすこ
久田陽春子 能楽大倉流小鼓方

学ぶ人

斉藤圭一 奈良県立図書情報館司書

古典芸能の打楽器「小鼓」。

現代ではピアノなどに比べて、馴染みが薄いかもしれません。

でも、よく思い出してみてください。

おひなさまの五人囃子の一人が小鼓を手に入っていますね。

今回は、図書情報館の司書サイターが、プロの能楽師に小鼓の稽古をつけていただいた模様をレポートします。



まずはごあいさつ

畳に正座して、礼



「よろしくおねがいたします」

小鼓の稽古には、南都七大寺の一つ大安寺の一室をお借りしました。講師は能楽大倉流小鼓方の久田陽春子先生。美しいです。ヤバイです。さすが舞台に立つ人です。袴に着物姿の先生と古刹。早くも「和」の空気が充満しています。

まず、大倉流小鼓方について『国史大事典』で調べてみました。

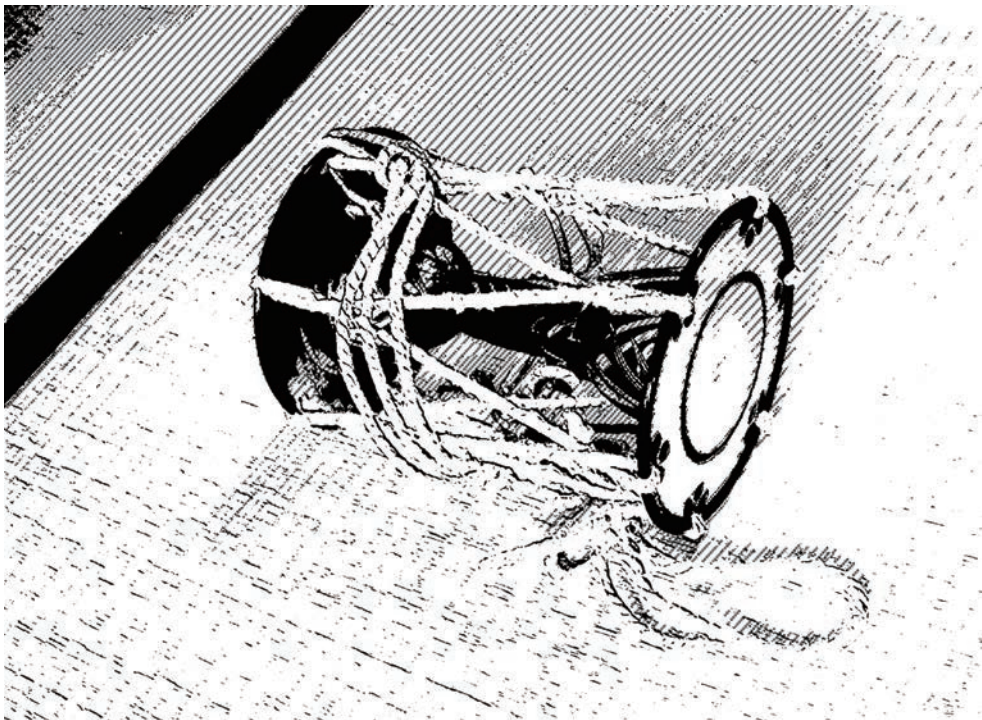
「大蔵権右衛門道遠（道意、一五四二―一六一四）によって始まる。豊臣秀吉のころ活躍……」

一六世紀から続いているのですね。

小鼓は、胴・皮（馬の皮）・紐（麻紐）で構成されています。お借りした胴にはカブラの蒔絵が描かれています。材は桜。カブラには「根が太い＝音が太い」との願いが込められているそうです。美しい蒔絵ですが、観客の目に触れることはありません。

久田先生いわく「隠れたところにも工夫を凝らすのが日本の伝統『見えない美学』です」。





右手膝横、左肘直角
顎を引き視線まっすぐ
額から汗噴出



さて、お稽古開始です。小鼓を左手に持ち右の鎖骨の辺りに引き寄せ、右手は膝の横。左肘は九〇度に張り、顎を引き視線はまっすぐ。大倉流の基本型「構え」です。見られることを意識したスタイル。和の雰囲気に一歩近づいた気がします。

いよいよ小鼓を打ちます。パチン、パン、パスツ……。音が出ません。右手のスナップを効かせるところが、つい力んでしまいます。鳴らない原因です。ここで久田先生の指導。手取り足取りです。大人なのに。何度もお指導をいただきます。申し訳ない。額から汗が噴き出します。

久田先生、嫌な顔一つされません。さすがです。日ごろの修練の様子がうかがえます。見習わなければ。などと思いつつなおも鼓を打っていると……。

ポンッ♪

おおっ！

ポンッ♪

ポンッ♪

おおっ！

ようやく美しい音色が……！

サイトー、超カンドーです！

久田先生によると「小鼓の演奏に重要なのは湿度。乾燥している場所では、皮に息を吹きかけたり、唾をつけて湿らせてチューニングをします。音は、西洋音楽の「ド」「レ」「ミ」のように、「ボ」「ブ」「チ」「タ」と四種類あつて、打つ指の数や場所、紐を持つ左手を握ったり緩めたりすることで出します」と解説してくださいました。

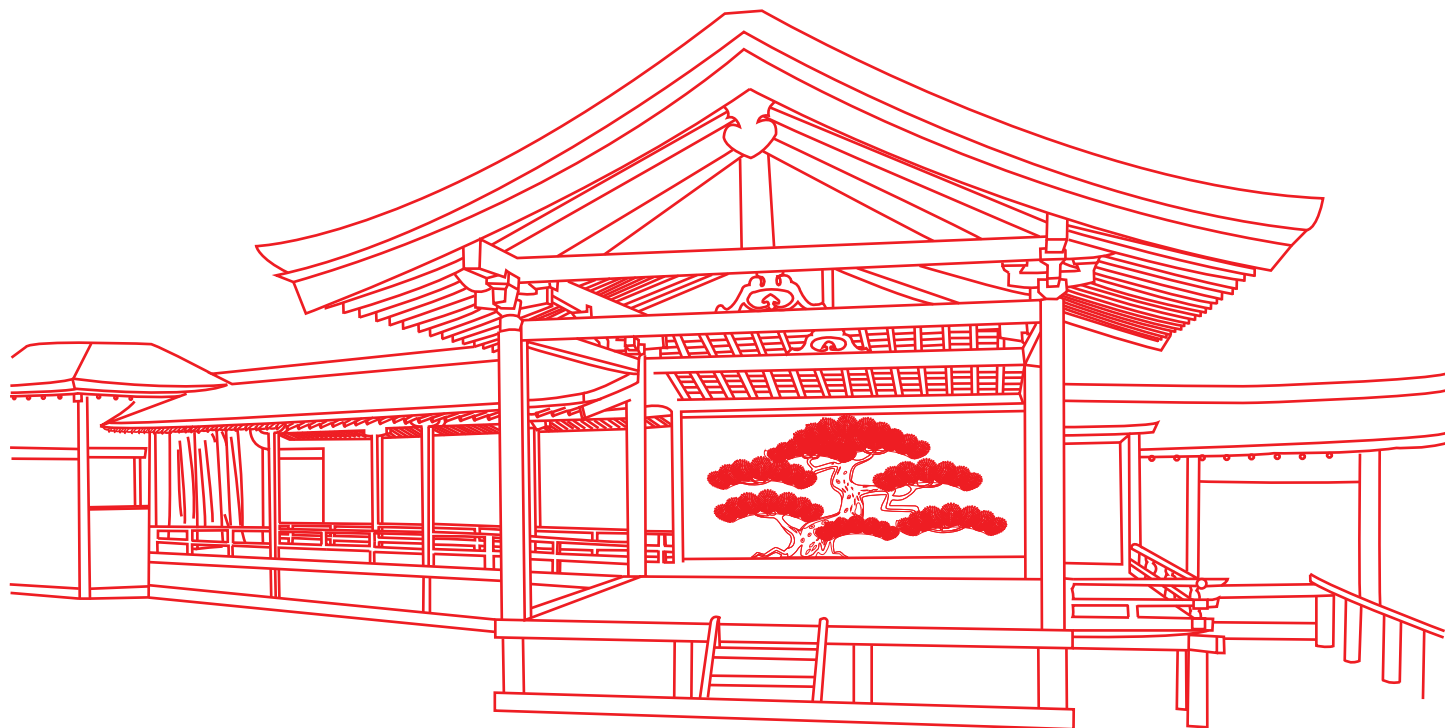
小鼓体験、かなりおすすめです。ネット情報によると、小鼓教室は各地にあるようです。久田先生も大阪をはじめ各所に稽古場を持つておられ、奈良はもちろん、台湾からも稽古に通われているお弟子さんがおられるそうです。



●取材協力…大安寺

能楽大倉流小鼓方
久田陽春子
十六世宗家大倉源次郎、父・久田舜一郎に師事。○五年大阪舞台芸術新人賞受賞。夫は観世流シテ方寺澤幸祐。長男・拓海、長女・杏海も子方として舞台を務める。

奈良発祥の 芸能『能楽』



現代で使われている能舞台のしつらえは、江戸時代に確立したとされる。かつては、芝生の上や、地面に板を敷いて舞台とし、演じたそうである。時代を経て芸術性が向上すると、為政者の庇護を受けるようになり、能舞台のしつらえも整っていったようだ。

能楽・猿楽

猿楽とは、奈良時代に中国から伝来し「散楽」が発展したもの。鎌倉時代には、歌舞劇としての「能」と、台詞劇の「狂言」に分かれ、室町時代に観阿弥・世阿弥父子が大成させたものが、現代に伝わった。

特に、大和国（奈良県）の大和猿楽四座が人気を得て、室町幕府の庇護を受け、勢力を伸ばした。大和猿楽四座は今の能楽の各流儀のもとで、現・桜井市を拠点とした外山座が宝生流、現・磯城郡川西町を拠点とした結崎座が観世流、斑鳩を拠点とした坂戸座が金剛流、現・磯城郡田原本町を発祥とした円満井座が金春流に受け継がれた。ちなみに「座」とは同業組合的な集団のこと。江戸時代には、幕府の式楽（公式の舞踊・音楽）となり、明治以降「能楽」と呼ばれるようになった。二〇〇一年にはユネスコ「世界無形遺産」に宣言された。

世阿弥

室町時代の能楽の大成者。実名、観世三郎元清（伝一三六三〜一四四三）。猿楽に音曲・作曲面で改革を行い、能の基礎を確立した観阿弥の子。自身、看板役者であったが、数々の名作の作者で『風姿花伝』など能芸論書の著作者でもあった。六百年を経て風姿花伝は普遍的価値により海外でも訳されている。

能楽のお囃子

能の囃子は笛・小鼓・大鼓・太鼓で演奏する。これらの演者を囃子方という。それぞれの楽器を専業で務めるため、担当していない楽器を演奏することはない。ちなみに、室町時代には大淀町松垣本地区に吉野猿楽の一つ「松垣本猿楽座」が存在し、囃子方に優れた人物を輩出したこと、特に笛方、太鼓方の芸祖だったことが文献から分かっている。

平城宮跡の顕彰と保存に生涯を捧げた

棚田

一八六〇（万延元）年五月二十二日（四月五日）生
一九二一（大正一〇）年八月十六日没

嘉十郎



平城宮跡にたつむ棚田嘉十郎銅像

明治から大正にかけて平城宮跡の保存運動に私財を投じ、身命を投げ打って尽力した一人の人物がいた。それが棚田嘉十郎である。

棚田は、一八六〇（万延元）年に大和国添上郡東里村大字須川（現奈良市須川町）に生まれ、一八八五（明治十八）年に高畑町で木挽職を、その二年後には東笹鉾町へと移り住み苗木商や植木職を営んでいた。植木職人として奈良公園で植樹をしている最中、春日大社や東大寺への参詣者から「昔の都の跡はどこですか？」と尋ねられること数百回。法華寺を御所跡と思い込んでいた棚田は、都跡村の住人と大極殿跡を訪れる。農家の牛の糞がうず高く積み重なり、見る影もない光景に思わず涙を流したという。一八九六（明治二十九）年十二月のことである。

時をさかのぼること千年以上、七八四（延暦三）年の長岡京への遷都の後、平城京跡は時間の経過とともに田畑となり、都の面影はすっかり失われてしまっていた。そんな田地の下に埋もれた平城宮に興味を持ったのが、江戸時代の末に大和の古市奉行所に勤めていた北浦定政である。北浦は測量調査を行い、一八五二（嘉永五）年に『平城宮大内裏跡坪割之図』を完成させていた。

この北浦の子息に宮内省諸陵寮守長を勤める義十郎という者があった。棚田は植木職人として、以前より義十郎から御陵の生垣の植樹などの仕事を請け負っていたが、大極殿跡からの帰路にまたま出くわした義十郎から「実は拙者の父定政が……」と北浦による大極殿跡の調査の「平城大内敷地図」の存在を知らされる。後日、この図面を義十郎から受け取った棚田はすぐに一万枚を印刷し、観光客らに配布する。これ以降、棚田は二十年以上におよぶ平城宮跡の顕彰と保存運動へと身を投じてゆくのであった。

一九〇六（明治三十九）年には、溝辺文四郎ら地元住民とともに「平城宮址保存会」を組織し、平城宮保存事業の賛同を得るため奔走。私財を投じたため生活は窮乏してゆくが、努力の成果が結実し、一九一三（大正二）年二月には侯爵徳川頼倫を会長とする「奈良大極殿址保存会」が設立する。しかし、喜びもつかの間、一九一四（大正三）年三月、棚田は脳充血で倒れ入院、その後失明状態となってしまう。さらに、一九一八（大正七）年七月には盟友であった溝辺が亡くなり、一九二一（大正一〇）年八月には棚田自身も保存事業の終局を見ることなく自ら命を絶つ。享年六十二歳。平城宮跡の一部が国の史跡に指定されたのは、翌年の一九二二（大正十一）年のことである。

文：松田恵子（奈良県立図書情報館）

平城宮跡保存の立役者 柵田嘉十郎の足跡をたどる

明治から大正にかけて平城宮の保存活動を行った植木職人の柵田嘉十郎。今でこそ大極殿や朱雀門などの建物が復原され整備が進められている平城宮跡だが、当時は都の面影はすっかり失われ田畑と化していた。彼の足跡と、平城宮跡の様子を資料とともに振り返る。

本誌の執筆のため九月のある休みの日、平城宮へ自転車走らせ。この前後一週間は秋雨前線の影響で長雨が続いてきたが、幸いなことに当日は雨も止んでおり出かけることができた。朝から曇っていた空もだんだんと晴れ渡り風に乗って鰯雲が漂い、トンボが群れをなして飛んでいた。道々のコスモスやザクロの実に秋の風情を感じつつも、お昼には気温も上昇し汗ばんだ身体は残暑の厳しさを実感する。

平城宮跡からそう遠くない場所で生活しているが、なかなか足を運ぶことはない。大極殿の前では野外オペラの特設ステージの設営の真っ最中でスタッフの人たちが慌ただしく働いていた。最近では平城遷都一三〇〇年記念事業や春・夏・秋の天平祭、今年（二〇一六年）から実施された冬の奈良大立山まつりなど県の集客を支える大規模なイベントの会場として利用されることが多い。

朱雀門の周辺には工事用の柵が張り巡らされ、いくつものクレーン車が首をもたげている。国と県によって平城宮跡歴史公園の公園工事が進められており、朱雀門の南側は平城宮跡歴史公園拠点ゾーンとして二〇一七（平成二十九）年度内を目途に整備されるようだ。工事現場の柵の脇にひっそりとたたずむ柵田嘉十郎翁像。このブロンズ製の像は彫刻家江里敏明氏による制作で、柵田嘉十郎翁・溝辺文四郎翁顕彰会によって一九九〇（平成二二）年に立てられた。像の向こうに工事のクレーンが伸びる。華やかであった都跡が荒廃している様子に心を痛め平城宮跡の保存活動に私財を投じて尽力した彼、保存計画の道半ばで自ら命を絶った彼。当時とは様変わりしているこの地に何を思うのだろう。

さてさて、次へ行こう。本日のメインは奈良市高畑町にある奈良地方事務局で旧土地台帳を閲覧することだ。平城宮跡から事務局までは直線距離約五歳の道のり。自転車のペダルに勢いよく力を入れる。



大極殿前では数日後に控えた野外オペラの設営が進む（2016年9月16日撮影）



奈良大立山まつりの様子。大極殿前に左から増長天、広目天、多聞天、持国天の大立山が並ぶ。（画像提供：奈良県ならの観光力向上課）

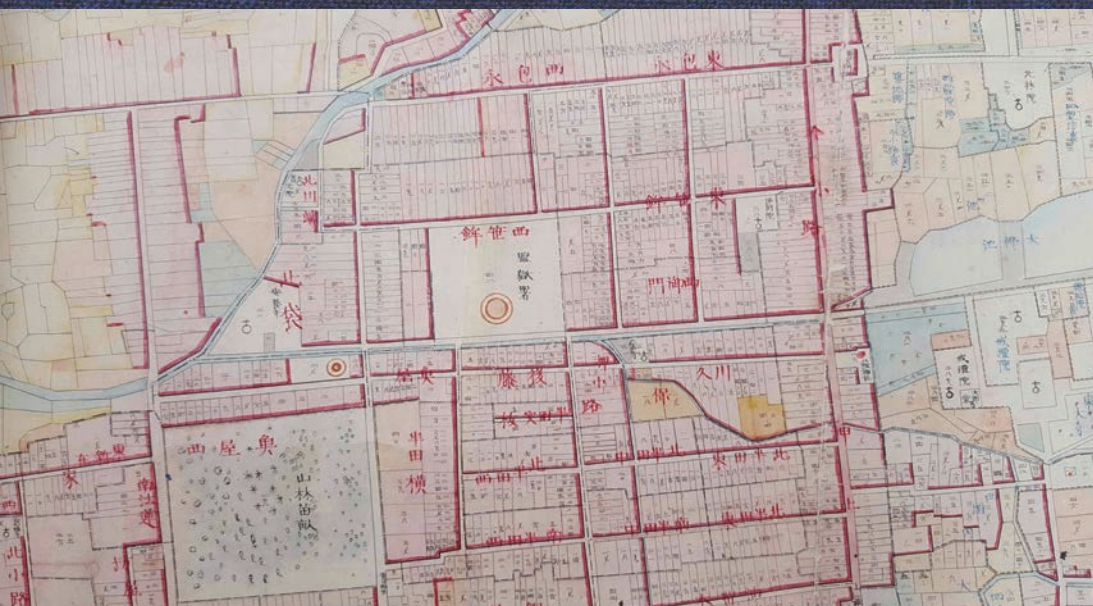
文・写真：松田憲子（奈良県立図書館）



奈良市街遠望（明治30年頃） 興福寺の五重塔の上から撮影されたものと思われる。中央のお堂は南門堂。左下から斜めに真直ぐ伸びる道は三条大路。遠望の平城宮跡は跡形もなく田園風景が広がる。（奈良大学図書館蔵）



東笹鉾町。10番は画像左の方



『奈良町実測全図』

(請求記号：T-2-111)

明治23(1890)年作成の奈良町の地籍更正図。原物は軸装されており、サイズは150×219cmと大きい。複製版は『日本近代都市変遷地図集成』(柏書房、1988年)に所収されている。画像は東笹鉾町周辺(奈良県立図書館蔵)

この頃といえば、本職の植木職人として奈良公園の改良のため松・吉野桜・楓などの植え付けを行った時期でもあり、初めて大極殿跡を訪れた時期にも重なる。明治三十年以降の転居実態不明だが、一九二一(大正一〇)年八月十六日に奈良市大豆山町の自宅で短刀で喉を突いて自刃しているから東笹鉾町から転居したことは間違いない。

ただ、大豆山町の旧土地台帳も調べてみたが、残念ながら名前を確認することはできなかった。

柵田嘉十郎は一八六〇(万延元)年四月五日に大和国添上郡東里村大字須川(現奈良市須川町)に生まれ、一八八五(明治十八)年一月二十日奈良市高畑町に、その二年後には東笹鉾町へと移り住んでいる。東笹鉾一〇番地に居住していたことが種々の資料から分っているが、現在は一〇番地という番地自体がなくなっている。明治の地図で確認してみることしよう(左地図)。

法務局の旧土地台帳では東笹鉾一〇番地に柵田嘉十郎の名前を見ることができなかったが、同じ東笹鉾町の違う番地に名前を見つけた。一〇番地から南に五十戸も離れていない場所だ。一八九四(明治二十七年)年三月十日に買い取り、一八九七(明治三十一年)年七月十九日に売り払っていることがわかった。



(上) 1997年12月の朱雀門の様子。大極殿や朱雀門などの建物が復元され、平城宮跡の整備が進められている。

1998年12月、平城宮跡を含む「古都奈良の文化財」がユネスコの世界遺産に登録された。(写真撮影：岡田庄三氏)

(左) 1957年の様子。現在の佐紀交番付近。1952年に平城宮跡の一部が特別史跡に指定されたが、まだまだ田園風景が広がり、一条通りにはボンネットバス、通学自転車、農業運搬用の牛車が見える。(写真撮影：福川美佐男氏)



1964年12月の発掘調査の様子。地下から奈良時代の排水溝発見。(写真撮影：木村守男氏)



1961年2月の佐紀町北側の発掘調査の様子。遠望に若草山。1959年からは奈良国立文化財研究所(現奈良文化財研究所)による継続的な発掘調査が開始された。(写真撮影：岡田庄三氏)

本ページの画像4点(地図除く)は『奈良の今昔写真WEB(奈良県立図書館ITサポートーズ)』から。『奈良の今昔写真WEB』では県内の様々な時代の風景写真を見ることができる。

<http://www.library.pref.nara.jp/supporter/naraweb/syasinweb.html>

